

魅力ある生活科授業とは

上越教育大学大学院学校教育研究科 木村吉彦

はじめに

生活科導入以前の我が国の学校教育は、建前はともかく、実質的に「教師中心主義」でした。それに対し、「子どもの思いや願い」を中心に学習を組み立てましよう」と提案したのが生活科でした。「はじめに教師のねらいあり」ではなく、「子どもを学校教育の真の主人公に」をめざすのが生活科です。この20年の間、様々な批判にさらされながらも、「児童中心主義」を標榜しながら生活科実践が展開されてきました。従来教科の発想とは違う、生活科のめざすものはどういうことなのかについて、残念ながら現場の先生方にまだ十分浸透しているとは言えない現状があります。

そこで、「魅力ある生活科授業とは」を問う時、まずは、そもそもの「生活科の教科特性」と「その存在意義」を確認することから始めたいと思います。それらが反映されていない生活科は真の意味の「魅力」を発揮していることにならないからです。それらを踏まえた上で、それぞれの「人」の立場の違いによって、魅力の内容が違ってくると思われまます。

以上から、小論は、1.生活科の教科特性、2.生活科の存在意義、3.「人」の違いによる「魅力ある生活科授業」、4.実践事例の紹介、という内容で論述を進めます。

1.生活科の教科特性

一 子どもの(発達)実態に即す教科

従来教科には、必ず学問的背景があります。例えば理科であれば、物理学・化学・生物学・地学など、国語であれば、国文学・国語学などです。人類の知的財産を、子どもの年齢段階に応じて配列したものが、従来教科です。そこでの教師の主たる仕事は、(知識・技能の)伝達です。一方、子どもの課題の中心は(知識・技能の)習得・復元となります。そこでの子ども理解は、各教科に見合った資質能力への理解、つまり部分的理解であっても学習活動は可能です。

それに対して生活科には、学問的背景がありません。そのために、子どもの事実・実態(何に興味関心があるのか、どんな活動をしたがっているのか)を教師が理解・把握することから学習が始まります。「はじめに子ども理解あり」の世界です。その際、子どもを全人的に理解する必要があります。子どものトータルな育ちを学力と捉える「全人的学力観」をもって子どもに正対してください。

二 自分自身を学習対象とする教科

「自分自身」を学習対象とすることは、従来教科では考えられなかったことです。従来教科の学問的背景が人類の知的財産ではあっても、子どもにとっては「外から」の課題だからです。それに対して、生活科では「自立への基礎を養う」という究極の教科目標から、「自分自身への気付き」を最も大切にします。今回の学年目標にも掲げられましたが、自己認識が生活科教育の最終目標なのです。より具体的には、「わかるようになっ

たばく・わたし」「できるようになったばく・わたし」に気付かせてください。そのことが、自己肯定感を引き出し、生きる自信につながり、自立への基礎をはぐくみます

三 体験を通して学ぶ教科～主観知と客観知の往復～

体験を通して学ぶとは、生活科が「自分とのかかわり」で自然・社会・自分自身について学ぶ教科であることを意味しています。そこでは、主観的（個人的）な知識が尊重されます。この主観知とは、実は客観的な認識の基礎であり、やがて従来教科の学力につながっていきます。ですから、生活科は気付いて（気付かせて）終わりではありません。自分自身の問題意識が学習の必然性を生み、客観的な知識獲得の原動力となるのです。

2. 生活科の存在意義

次に、生活科の存在意義を確認します。

一 自己決定・自己選択の機会の提供～思考力と主体性を備えた児童の育成

活動の大枠（例えば、飼育か栽培かなど）は教師が決めるが具体的な学習内容は子ども自身に任せる、という学習形態に基づく存在意義です。子ども自身に課題決定のチャンスを与えることで、物事に主体的にかかわれる力を養います。低学年段階でのこのような機会の提供は、主体性作りの基礎となります。

二 「学ぶ必然性のある学習(機会)」の提供～「なぜ勉強するの？」への答え

子どもたちは、自分の活動を作文に書きたいために、まだ習っていないカタカナや漢字を担当に質問します。また、正しい野菜の収穫をするために、正確に丈や重さを測りたいので上級学年の学習内容である算数の単位（cm、g）を教えてもらいにきます。自分で見つけた課題を自分の力で解決するために、自ら考え、自ら学ぶ力を養ってくれるのが生活科です。探究的な学習のはじまりです。

三 よりよき生活者の育成～日常生活の中の課題を自分自身の力で解決しようとする人間づくり

子ども自身が強い問題意識（おいしい野菜を作って食べたい）をもって問題解決に当たり、その中で図鑑等を用いて客観的な知識（正しい収穫時期等）を習得するプロセスを生活科は大事にします。子どもの日々の生活や活動の中で課題を見つけ解決する機会の提供がポイントになります。ここに、日々の活動を大切にする飼育・栽培を大単位とすることの妥当性があります。

四 「生きる力」育成の切り札～全人的な教育観

生活科では、子どもを多面的に理解する必要があります。子どもを全人的に育てるために教師の子ども理解（評価）力の研磨が必要になります。生活科に対して積極的に取り組もうとする先生と抽象度の高い教育目標実践の難しさに辟易する先生に分かれる原因はここにあるのかもしれませんが。学校教育や教師の使命についての知見と見解、さらには教師一人一人の教育観・教育哲学が問われています。

3. 「人」の違いによる「魅力ある生活科授業」

一 子どもにとって～気付きの質を高める4つの手だて 本誌 2009 年 10 月号に掲載させていただきました「気付きをもとに考える力を高めるために」大事にして欲しい4つの

手だてが実現されていれば、子どもにとって魅力ある生活科授業になっていると思います。詳細は、2009 年 10 月号をご覧ください。

対象とじっくりかかわれる時間と場所の確保

第 1 に、対象とじっくりかかわれる時間と場所を確保することです。飼育や栽培はもちろん、おもちゃ作りなどでも、子ども自身が納得行くまで没頭できる時間と空間を子どもたちに提供してください。

多様な対象とかかわれること

第 2 に、多様な対象とかかわれるようにすることです。例えば、野菜作りでは、子どもが自分の植えたい野菜を決められるようにすることです。おもちゃ作りでも、素材や種類を豊富に確保した上で、活動を進めてください。

豊富な交流機会の提供

第 3 には、交流の機会をたくさん持つことです。活動における協働作業はもちろんのこと、話し合いなどによる交流の機会を提供することで、様々な問題に気づき、考えるきっかけが与えられます。

自己表現の機会の提供

第 4 には、気付いたことなどを表現する機会を多く設けることです。教師は、毎日の活動の中で、児童の気づきを話し言葉や書き言葉、絵等で表現する機会を様々に設けることが大切です。日々多様な対象とかかわれることを大切に、交流や表現の機会を多くもつことが、観察力や思考力、そして豊かな表現力を育てることにつながります。

二 教師にとって～子どもの成長が見取れる授業

生活科の場合、教師も子どもと共に活動し、共に学びあい、共に授業を創り出すことが重要です。活動自体、教師自身もやってみたいと思える内容を教材とすることが大事です。それによって、教師が子どもの活動のモデルになり得ます。そして、共に活動しながら一人一人の子どもの成長を記録していきます。もちろん、振り返りによる学習シートや作文のポートフォリオ記録をため込み、子どもの内面の成長も見取ります。それらの成長の姿から教師の自己有用感が生まれ、教師自身も自己肯定感（自尊感情）を持つことができるのです。

三 参観者（観察者）にとって～自分の課題を自分で解決しようとする子どもの姿が見取れる授業

例えば、私は同一クラスに週 1 回のペースで継続的に足を運び、参与観察（アクションリサーチ）という手法で実践研究を進めています。子どもの具体的な姿と担任の姿から、生活科のあり方について、短期的（1 時間ごと）・中期的（小单元ごと）・長期的（年間を通して）に理解しようとしています。生活科の場合、1 時間の授業を観ただけでは、その魅力について理解することが難しい場合が多いのが現実です。しかし、短・中・長期的な視点に共通して言えることは、「自分で見つけた課題を自分の力で解決しようとする子どもの姿が見取れる授業」と「子どもの成長が感じ取れる授業」が、文字通り魅力ある授業です。

四 保護者にとって～子どもの成長を確かめられる授業

生活科の場合、保護者も巻き込み、教師と共に子どもの成長を確かめ合えることが大切です。そのために、子どもの成長が実感できる授業に保護者を招待し、教師と共に子

どもの伸びや成長を認めてあげてくれることを心がけたいものです。そのような授業は、保護者にとって文字通り魅力的な授業です。これは、保護者の担任への信頼感、ひいては学校への信頼感を生み出します。結論的には、学校にとっても魅力ある授業なのです。

そのような授業を次の実践事例で紹介します。

4. 実践事例ーそもそもの教科目標にとって「魅力ある 生活科授業」とは

最終的には子ども自身が「自分自身の成長」に気付くことができる授業が魅力ある生活科授業です。その「育ち」を担当も保護者も共に認め、子どもをほめてください。

2年生の最終単元の実践～単元名「あしたへジャンプ」

柏崎市立剣野小学校・平成十九年度・担任：田中歩教諭

本単元は、2年生の最終単元であり、2年間の生活科の総まとめの単元でもあります。まさに「自分自身の成長への気付き」に直結する内容であり、これらの学習を通して、自立への基礎を築くための原動力にもしていきたいと考えました。以下の2点がねらいです。

ー 「やったぁマン作り」を通して成長した自分を実感させる活動の展開を図る。

「あしたへジャンプ」の単元では、入学からの2年間の学びを振り返り、自分の成長をまとめることを通して、自分自身の成長を実感し、自信と意欲をもって進級する児童を育むことを意図して「やったぁマン作り」の活動を行いました。「やったぁマン」とは、等身大の自分自身を描き、そのまわりに「できるようになったこと」「がんばったこと」などが書かれたカードを貼り、最後に等身大の自分に成長を実感する言葉を書いた吹き出しを付けて作り上げました。もう一人の自分自身です。「やったぁマン」を完成させることで、今までの生活科や他教科の学習、毎日の生活などを通して、自分が成長してきたこと、自分の役割が増えたこと、できるようになったことなどが視覚的にもすぐに実感することができます。



剣野小学校では、成長単元を小学校入学からの2年間の振り返りという内容にしています。その意図は以下の通りです。

生活科を核として様々な体験や学習を積んできた児童に2年間の学びを振り返らせ、学校生活の楽しさや自ら学ぶ力を身に付けたことを再確認させるため。

小学校低学年での自分の成長を自らの記憶から探らせることで、実感の伴った振り返りをするため。

近年複雑化する家庭環境に配慮し、あえて、誕生から入学までの成育に関する事項を取り上げず、学校における学びをより意識化させるため。

これらを通して児童が自分自身の成長に満足し、自信と喜びをもってその後の学校生活につなげていくことができるのです。

二 保護者、友達とともに成長を喜び感謝する会を設定

自分の作った「やったぁマン」を展示し、それをもとにクラスの友達や家族と見合い、自分ができるようになったことを発表する活動を設定しました。このような喜びを共有

する活動を通して、さらに自分自身の成長を実感し、満足したりこれからも成長できる自分を自覚したりすることにつながるでしょう。

三 「やったあ発表会」で自信をもって自己表現する児童たちの姿

「やったあマン」が完成した後、これまでの2年間でお世話になった方や保護者をよんで、「やったあ発表会」を開きました。企画、運営はすべて児童に任せました。教室に児童の「やったあマン」を掲示し、その中で一人一人ができるようになったことや自覚できた成長を語りました。保護者と、もう一人の自分である「やったあマン」に見守られて、親子共々、成長の喜びでいっぱいの会となりました。さらに児童にとっては、支えてくれた方々や近くで見守ってくれている家族に感謝する場にもなりました。



児童はこれらの生活科の最終単元での学びを通して、小学校2年間の「やったあ！」の姿を振り返り、学校生活で学んできた自信と喜び、自分のよさ、さらに今後も成長していく自分の姿を胸に、3年生に進級していくことができました。児童自身が成長への喜びを胸に、3年生へ向かって意欲をもつことができ、それが生活科でめざす「自立への基礎を養う」ことに大きくつながりました。

おわりに

生活科の教科特性と最終的な教科目標を把握した上で、教師も子どもも共に活動し、最終的には保護者からも自分の成長を認めてもらうことが生活科授業の神髄です。その実現が見取とれる授業こそが、子どもにとっても、教師にとっても、保護者にとっても、参観者にとっても、魅力ある生活科授業なのです。

引用・参考文献

- 田中歩「子どもたちの『やったあ！』を生かした生活科の授業構想～『自分自身の成長への気付き』に焦点をあてて～」(上越教育大学学校教育実践研究センター『「教育実践研究」第20集記念誌 教育実践研究へのいざない』2010 所収)
- 木村吉彦編著『小学校 新学習指導要領の展開 生活科編』(明治図書 2008)

木村のHP「よっちゃんの部屋へようこそ！」(Yahoo! JAPAN)